うさぎロボ　著

一章　ちょっと自慢入ってない！？「僕、巨根が恥ずかしいんです……」

　――面倒なことになっちゃったわね……

　船長室。

　中古のひじつき椅子に溶けるように減り込む女。冬城コトネ、三十五歳。下の子が遠くの高校に入って一人暮らしを始めたので手が空いた。そこで漁師である夫が前から言っていた、女性だけの漁船の話を受けることにした。

　コトネが暮らす街は、寂れつつある漁港。若者が次々と都会に出て――おそらくコトネの子供らも戻ってこないだろう――漁師のなり手が減り、危機感を持っていた。

　そこで若者を呼び込む手を考えようというのが普通の感覚だ。普通の感覚で何かしてもなかなかうまくいくものでは無いだろうとコトネも思う。

　とはいえ、普通と違えばいいというものでもないだろう。

　コトネの夫たちが考えたのは、近場で済ますことだった。

　自分たちの妻のうち、今から漁師ができそうな比較的若い者に漁師をやってもらおうという、適当というか無茶な考え。

　それでも、特に仕事もない街なので少しは志願者もおり、数隻稼働している。

　漁師はどうしても力仕事がいってくるので、夫らと同じぐらいはとても稼げないが、燃料代などのコストを引いても一様バイトよりはいい。

　コトネが任された船は第一〇〇海神丸という名前だけは立派なカツオ漁船。小さいものだが、一度漁に出ると数日は戻らない。

　であるからには、力仕事を任せる男を乗せるわけにもいかない。

　シャワーもトイレも共用、寝室も一つしかないのだ、コトネらが我慢するといっても夫たちが反対するだろう。

　まあ、コトネらも我慢する気など全くないが。

　というかそれ以前に、乗せられる男がいるならコトネたちが呼ばれることもなかっただろう。

「あー、困った！」

　つい、口に出してしまう。困ったからといって「困った」などと口に出しても何の意味もないが、それでも出してしまった。

　通信機を前に、ため息をつく。

　密航者だ。

　漁師に憧れているという子供がいつの間にか船に紛れ込んでいた。

　船に住んでいるわけではない、停泊中にもぐりこむのは簡単な話だ。

　十人乗りの小さな船だが、隠れようと思えばいくらか隠れ場所はある。

　その子供は、電気の配線関係の小さな部屋に隠れていた。

　どうも、学校で女の子たちにいじめられている感じだ。体のことでからかわれるという。見た目はかわいい子だが、気弱そうではある。

　――男女が逆なら、**「キ〇タマ蹴っちゃえ」**ってお姉さんのアドバイスもありうるけど、

立場が逆だからねえ……弱いほうだけが急所をぶら下げているという理不尽。

　ナノテクが発達し、睾丸ぐらいなら一〇秒で治せる時代である。それだけに女性たちは同じ反撃を食らわないそこへの攻撃を全くためらわない。

　幼い少女となると余計にその傾向は高まる。睾丸など、彼女らにとってはただの的でしかない。本来の役割を知る大人女性よりなおさら容赦なく狙いまくることになる。

　ともかく、女子にいじめられているので、漁師の男の世界にあこがれていたらしい。

　それで女性だけの船に乗ってしまうのは間抜けだが、同年輩の女子たちと大人女性は違うようで、特に船を降りたいとも言わない。熱心にこの船に乗りたいといっている。

　今ちょうど夏休みである。

　隣というか、山の方の町から出てきて、目についた船に乗り込んだというわけだ。

　――漁師になりたいんだ？　ほんじゃ、ちょっと手伝ってもらおうかな。なんて言えないのよ、今の大人は。誘拐になっちゃうじゃん。

　しかし、コトネの部下の女たちは割と少年の願いに同情的だった。

　そこそこ可愛く、気弱そうな少年はマスコット的にちょうどいい存在だろう。

　これが女の子だと「迷惑」でしかないだろうが、「ややプラスの見た目のはるかに立場の弱い異性」が玩具として有望なのはなんとなくコトネにも感じられた。

　無責任に「乗せてあげようよ、どうせ一週間もせず港に帰るんだし」といいたくなる気持ちもわかる。親に連絡し、事情を説明する役が自分でないなら。

　――こういう時だけ「船長だから」って何よ……普段は「船長たって私たちと一緒に船に乗り始めたんじゃないの。ちょっと年上だから船長になっただけでしょ」って感じで……直接言わないにしても、臭わせてくるくせに……

　引き返せないところまで行ってから、と思ったようで、夜まで隠れていた。

　返すとしたら、今からでも引き返すことになる――夜だが、昼より速度を落としつつも航海は続けているのだ、同じ調子で港に向けて走り出す形。

　一日走ったのが無駄になってしまう。

　そして帰る一日もあるので、二日分だ。

　二日で漁場につき、一日漁、そして二日で帰るという何とも無駄の多い計画。

　一日の漁で、五日分の人件費と燃料費が出る。

　そしてまた五日の漁に出るわけだ。小さなサイクルだけにリスクも少なく、今回の漁がパーになろうと破滅するわけではない。

　しかし面白くない。

　コトネは雇われ船長で、給料をもらうだけだが一様責任がないでもない。

　玩具云々はともかくとして、むしろ彼女もこのまま何事もなかったように漁を続けたい側だ。

　とはいえ、親への説明。

　――密航されちゃいました、このまま漁に連れて行きます。っていうのは、かなりきついわ。私が親御さんなら怒るわよこれ、事故でもあったらどうするの、早く連れて帰ってきてって怒るって。いや、密航したのは自分の子供のわけで、その分の負い目はあるものの……それは、子供が無事帰ってきた後で燃料や人件費を補填するという形であって、子供の安全について主張するのを遠慮はしないわよね。

　と、ふと通信機を見る。

　子供は携帯を持っていたが、当然圏外だ。

通信機で漁業組合に連絡し、そこから子供に聞いた彼の家に連絡してもらう形だ。

拍手のようにポンと手を叩く。

「あ、私話す必要ないじゃん」

パ、と顔が明るくなる。

漁業組合の人間になら、被害者面もできる。

というか実際ほぼ被害者だが、子供を心配する親にそれを示すのは心苦しい。

しかし身内の組合員になら理屈で彼女が被害者であることを説明し、うまい事向こうに言っておいて、という事ができる。

そう考えると、急に心が軽くなった。

戻るにしても連れて行くにしても、直接の説明が他人なら気楽なものだ。

他人というか知り合いだ。夫同様地元出身で、漁師ではなく漁協に就職した。夫より大きな一物の持ち主、何度か浮気した相手。多少コトネが面倒なことを言ってもあまり強くは出てこれない立場だ。

立ち上がる。

ブルン、と勢いよく水風船が揺れる。巨乳、いや、爆乳といっていい。

若いころはまだ巨乳レベルだったが、腹や太ももに肉がつくのに合わせて胸にもこれでもかと肉がついて今やランクアップだ。

見る人間も見せる人間もいないので、他の乗組員同様薄いシャツである。下はタイトで超ミニのジーンズ。適当な恰好をしているだけなのに爆乳の形や、太ももを見せつけたくてしているようにしか見えない。

扉を開けると、すぐ前は船員たちの部屋だ。

ろくでもない船長の地位だが、個室がもらえるのが唯一の慰めだ。

とはいえ、右隣はトイレで、左側は船尾で機関室があるのでうるさくて仕方ない。

小さな船なのでなおさらだ。

船室からの会話を耳の端で聞きつつ、左にすぐ行くと階段、そこを通り過ぎるとシャワー室だ。

機関室から出る熱を利用しているのでいつでも湯が使える。

今もシャワーの音が聞こえる。

この喫水線下の船の最下層にはほかにもキッチンや燃料タンクがある。

正直設計した人間が無能としかコトネには思えなかった。機関室や燃料タンクと同じ階層に寝泊まりするのはうるさいし臭い。そこで料理をするというのもなんとも言えない。

しかし、仕方ない。上の階は甲板から魚を放り込む倉庫や、そこで解体した魚を入れる冷凍庫、そして漁の道具を甲板から入れるための倉庫などがあるのだ。それを最下層にするのは難しい。

道具を一番下などにすれば持ち運びに不便で仕方がない。

だからこの構造も仕方ないといえば仕方ない。

脱衣場に入る。

「あら？」

エンジン音に、声はかき消される。

服を入れる籠を見る。子供の服だ。

「なんだ、あの子が入ってるんだ」

引き返そうかと思う。男女云々というより、知り合いという事もない他人がシャワーを使っていれ

ば普通は引き返すだろう。狭いシャワー室なのだ。

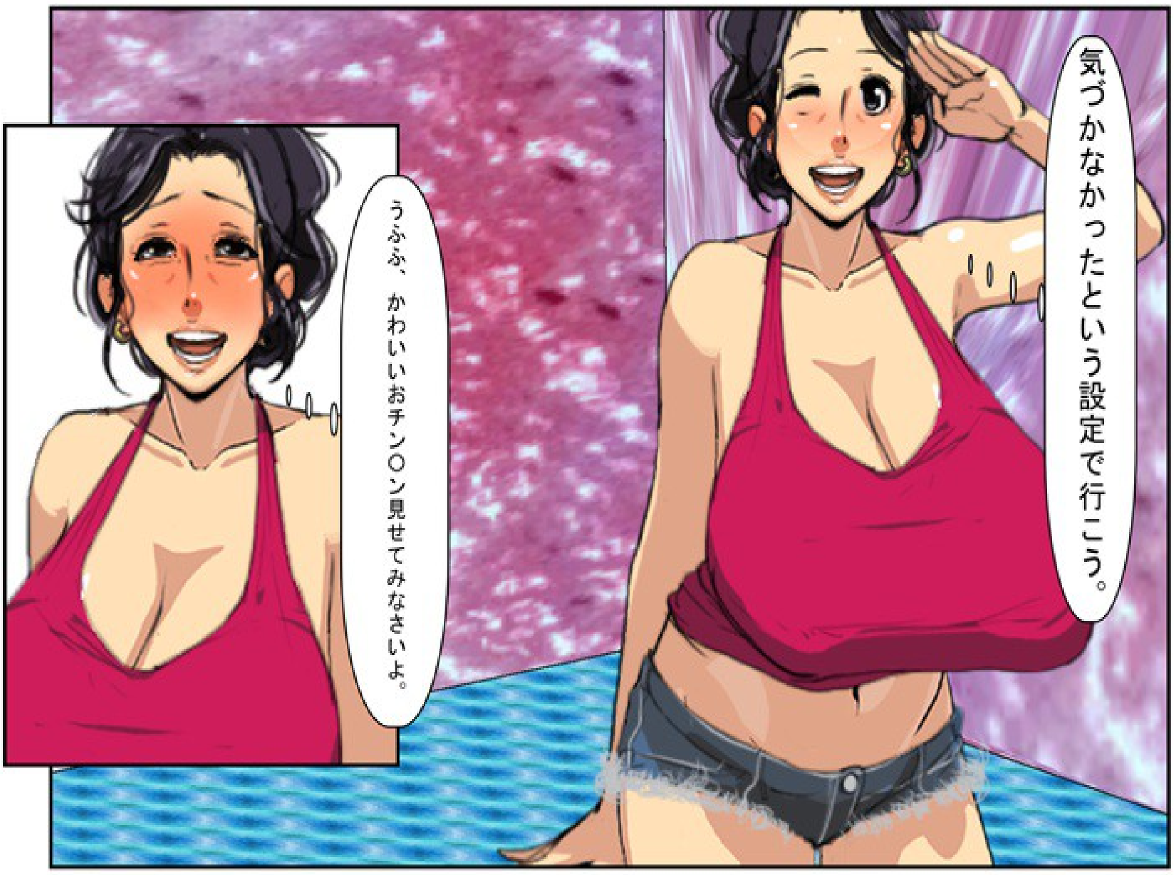
一瞬体をひねろうとする、が、面倒だ。

いや、違う。入りたい。

——旦那ともご無沙汰だし、最後の浮気からも結構経ってるし……最後におチン〇ン見たのって、もう年単位前じゃない？　そりゃ大人が入ってるなら「ういいいい、熟女でございます」って全裸で入り込んではいけないよ？　私だって赤の他人の大人の男の体なんて見たくないし。でも子供なら別にいいでしょ、そんなに細かいこと言わないでも。まあ男女逆ならタ〇キン蹴りだけどさ。

なんだかんだ考えつつ、シャツをまくり上げる。腕を抜く、その前に乳房をくぐらせる。スイカふたつである。結構な重労働。それでもコトネにとっては毎日のことなので無心。腕を抜き、頭。爆乳用の、飾り気がないブラジャーを外す。スイカ大の乳房にふさわしい手のひら大以上の乳輪と小指のような乳首。

——気づかなかったという設定で行こう。うふふ、かわいいおチン〇ン見せてみなさいよ。



ジーパンを下す。これまた飾り気がなく、色もブラジャーと全くそろっていないパンツ。

パンツの下の垂れ気味の丸々とした尻。それでも一緒に入る船員たちの中には、自分より若いが尻肉が垂れている者がいるのを目ざとくコトネは値踏みしていた。

自分は結構上のほうだと考えていた。

パンツを脱いで籠に放り込む。

のっしのっしと、男に千回以上は余裕で抱かれている熟女らしく、男に股間を見せるのが恥ずかしいなどともう大して思っていないかのように特に隠しもせずシャワー室に入っていく。

まあ相手が大人ならまた別だろうが。

シャワー室は三人が立って並ぶ形。一番端に少女が立っている。

少女と見まごうが、少年だ。

入り口に背中を向けて、湯を浴びて気づかない。

——全然筋肉も何もない、女の子みたいね。まあ、子供だからこんなもんよね。かわいいお尻……それに、太ももの間からしっかりおチン〇ン見えてるわ。膝の間までブラーンっと。

「げ！？」

思わず声を出す。口を押え、少年の頭のほうを見る。別に気づいた様子もなく、シャワーを浴び続けていた。

口を押えた手を震わせるコトネ。睨み付けるように少年の足の間を見る。本来何もないはずの場所、しかし、悠然と肉の棒がぶらつくそこを。

——うわ、ちょ……うっそでしょ。何あれ？　やだ、あの子の腕と同じぐらいじゃない？　やだ、うちの旦那の立った時よりすでにデカいんですけど……剝けちゃってるし……先っぽ丸々して、絶対皮被らないよ……旦那のは、油断したら被っちゃうのに……

思わず唾を飲み込む。飲み込んで、顔を赤らめる。

——やだ、だめよ。そんな、大きいから興奮したとか、そんなの男の妄想の中でしかない話よ。大

きさなんて意味ないって。で、でもこれは……ごっついわねえ……すっごいペ〇スしてるわねえこの子、お尻の下から見えるだけでも普通の大物より長いもん。本人の手より絶対太いし……キンキンボールもでっかいの？

　涎が垂れる。わざと開くようにして歩いていた股を締める。全体的に心なしかしおらしく見える姿勢。

　巨根を前に、女に目覚める。

　そう単純な話でもないが、大まかにはそういう話である。

　ごくんと唾を飲み込む。股間がじっとりとしてくるのは濃厚な湯気のせいだけではない。

　ずっと黙ってもいられない。どう声をかけるか。

　一方で少年。梅南ハルトモ。

　自分の一物が他人より大きいらしいと気づいたのは幼稚園の頃だった。

　好きな女子にズボンを下されたとき、指さされて言われたのだ、パパのより大きい、と。

　その日からあだ名はデ〇チンとなった。

　ある日、保母に相談した。

「あら、あのあだ名、本当にそういう言う意味なんだ……それじゃちょっと先生に見せてもらえる？　あ、うっそ、やだあ、いやん……本当におチン〇ン大きいのね、ハルトモ君。あ、このことはみんなには内緒よ？」

　それは「一物を保母に見せたことを内緒にしろ」という意味だった。

　しかしハルトモは、皆に笑われている——というか主に女子に思いっきり笑われている——巨根という特徴が隠すべきものなのだといわれたと思った。

　以来、それが心から恥ずかしかった。にもかかわらず、他の部分より圧倒的にそこばかり成長していった。

　隠し、恥じていることで余計にバレると笑いものにされる。

　最近では、クラスの中心的な女子にバレたので、休み時間のたびに人気のない三階などに連れていかれて、他のクラスの女子まで呼んで**巨根鑑賞会**を開かれる始末だ。

　逆らうことはできない。

　少し前、よく女子に嫌がらせをしていた他のクラスの中心的男子がいた。

　細かいことはハルトモは知らないが、ともかく何かやり過ぎたらしく、女子たちに寄ってたかって叩きのめされた。

　叩きのめすというか、女子らは集団で金的ばかり狙って蹴りまくったという。

　その男子も必死で抗ったらしいが、相手は同じ急所を持たない女子たちなのでやり返しもならず、そもそも相手が年端も行かないロリとはいえ何発か金的を蹴られれば戦闘力などなくなる。しかし女子たちは積年の恨みから執拗に攻撃を続けた、金的ばかり狙って。

　今は潰れても治っちゃうから、いざってときは男の子の急所を遠慮なく狙うのよ、などと女の子たちは母親に言われている。

　そんな話を、その金的リンチにも当然参加していたクラスの主導的女子からハルトモは聞いた。

　それではとても逆らえない。

　下手に逆らえば金的集中攻撃だ。

　それも、玉がないロリたちから一方的に。

　金的への恐怖から、ハルトモは巨根鑑賞会に出ざるを得なかった。

そして女児たちに散々いじくられてますます巨根を恥ずかしく思うようになっていった。

夏になると、プールで海パンを脱がされたりとますます**ロリたちの巨根いじめ**はヒートアップし、ハルトモはロリたちへの恐怖と自らの巨根への羞恥を強めていった。

そんなある日、漁師たちのドラマを見る。

ドキュメンタリーと多少勘違いした感じのハルトモは大いに感化され、これが自分の生きる道だと簡単に思い込んだ。

そして夏休みが始まるや、漁師になろうとこの船に乗り込んだわけだ。

女ばかりの船だと知って愕然としたが、母親より年上の女性たちなので同級生のロリたちとはもう別の種類の人間だと割り切る。

文句を言っても船を下されるだけだという考えもあった。

頼むと、割と簡単に乗せてくれるという話になった。

ただし、この航海の間だけだという。

うまく売り込み、夏休みの間ぐらいは乗せて貰えるように頑張るつもりだった。

話し合いは寝室兼船室で行われ、終わると船長が連絡に出ていき、しばらく熟女らと話をした。

ハルトモがかなり幼いころ流行った漫画やアニメを熟女らは結構知っていた。彼女らにとっては、子供が最後に見ていた感じのコンテンツだ。

とはいえ特に盛り上がるという事もなく、熟女らはすでにシャワーを浴びていたので、ハルトモも入ってくることになる。

一緒に入ろうか、などというものもいた。ハルトモは顔を赤くしてしまい、熟女らは楽しそうだった。

熟女らは誘ったつもりだったが、ハルトモには他人の男女が一緒にシャワーに入るなど可能性を考えることもなく、冗談としか認識しなかった。

別に是が非でも一緒にシャワーに入ったりいろいろしようというのでもないので、熟女らはハルトモを見送った。

そうしてハルトモがシャワーに入って少しして、船長が入ってきたわけだ。

背後の船長に気づかず、シャワーを浴びるハルトモ。

ほっそりした太ももの間にぶら下がる太く長すぎる肉棒が注目されているなど気づきもしない。

恥ずかしいそれを、熟女らに気づかせるつもりはなかった。

見られているとわかっていたら、すぐに足を閉じただろう。

――明日から頑張ろう。

思いつつ、振り返る。

ブルルン、何か巨大な肉の塊が頭上に揺れていた。見上げて、その上に熟女の顔があるのに気づく。

驚き、思わず下を見る。下も丸出しだ。女のジャングルと、その下の肉の割れ目。ピンクの花びらの色が濃いことなど、想像もしないハルトモ。

見たいものを見つつ、ぎょっとなる。キュッと、こちらも巨大な肉玉が引きあがる。

「な、あ」

顔がカアっと赤らむ。

手をぱたぱたと小さく振る熟女。

「あ、私は大丈夫。気にしないで。子供だっているんだから」

——娘だけど。あは、ほんとおっきー。信じられないもんぶら下げてるわねえ。あら？　金の玉縮んでる？　うふふ、ビビってるんだ……まあこの体格差だしね。背丈半分ってことはないけど、体重は……いや、体重も半分ってことはないか。

半分どころか、下手をすれば三倍行くかもしれない。乳房が巨大すぎる。

だが、その辺は心の中でさえ誤魔化す女心。

「シャワー、温かいでしょ？」

さりげなく、このままお互いシャワーする流れを演出しながら湯を浴び始める。

棒立ちのハルトモはぎこちなくうなづく。ユラユラと巨棒が揺れる。縮んでいるが、ほとんど膝の間で揺れていた。

「は、はい」

「エンジンの熱で温かいのよ？　ほらー」

ノズルを取り、手で温かさを確認してから、ハルトモの太ももにかける。そして徐々に上げて、縮んだ肉玉にかける。

「ふあっ」

「タマタマ縮んでるよー。寒いんじゃない？　きゅっきゅーっと、金のタマタマ引き締まっちゃってるじゃない」

「や、やめ……」

膝を締め、手で押さえて一物を隠そうとするハルトモ。しかしとても小さな手で隠せる代物ではない。

顔を真っ赤にする。

また巨根をバカにされる。

その様子を見つつ、気づくコトネ。

——やだ、体のことって……おチン〇ンが大きいってこと？　それで女の子たちにいじめられてる？　やだ、何その**ちょっと自慢みたいに聞こえるお話**は。っていうか、いじめられてるというよりいたずらされてる感じかな？　マジで男女逆ならタ〇キンキック以外にないけど……。

「うふふ、うちの旦那ね、こんな大きくて男らしいおチン〇ンしてるのよ」

「え」

ハルトモの巨棒の二倍ぐらいの、ありえない大きさを示す。

——夫がマジでこんなもぶら下げてたら離婚の理由になるわよ。でもここではそういう話にして……デ〇チンを持ち上げて、コンプレックス解消してあげるわ。

「ここだけの話ね……おチン〇ンが立派だから結婚したの。だって、私たち女の子って大きなチン〇ン大好きなんだもん」

「そ、そんな……嘘でしょ。だってみんなこれに意地悪……」

さりげなくねじ込まれた「私たち女の子」という**ファクトチェックされたらまずい表現**に気づきもせず、動揺を隠せない巨根ショタ。

「あ、それは子供だからじゃない？　大人の女はね、これの価値がわかるのよ」

言って、今気づいたようにまじまじとハルトモの巨棒を見下ろす。

「あらあああ！　まあ……、君、ハルトモくんだったよね？　うわ、年の割にはすっごい大きい立派なチン〇ンぶら下げてるねえ。すっごいおっきいおチン〇ン、ぶら下げてるわねえ。いやああん、立派。立派ねえ。**丸太ん棒みたい**」

　しゃがむ。それでも目線の下になってしまう巨棒。

　――やだ、ほんとこの子かなり小さいんだ……いや、チン○ンとおキャン玉だけ超巨大だけど、ほかはすっごい小さい……私絶対、この子のお母さんより年上よ。……これ、やばい構図じゃね？　まあ、「おねショタ」ならいいよね。「おにロリ」なら金ちゃんキック＋タイーホだけど。

　一瞬の葛藤とずうずうしい思考。

　そんなことは全く感じさせず、熟女はただ目を剥いて巨根に驚いて見せる。

「やだ、やだ、ほんとに超デ○マラなんですけど……周りの子で、同じぐらい大きい子いる？」

「い、いない……」

「やっぱり！　うふふ、これ、ほんとでっかいわよ。あ、おキンキン緩んできた。えい」

「はうっ」

　親指と人差し指で根元を握り、肉玉を手の中に収める。

　うねうねと指を動かす。命の玉が他人の女の手の中にある不安とほの暗い悦びに膝が震えるハルトモ。

　その完全拒絶ではない姿を確認してにんまりしつつ、揉むスピードを上げる熟女。

　――金ちゃん触らせない男の人もいるからね、この子はむしろ握られたい側……ＳかMなら断然**M側の住人**と……それなら遠慮なく。うふ、タマタマの感触ってホント不思議な気持ちよさなのよね。

「ボールモミモミ、ボールモミモミ、男のボールをもーみもみ」

「や、やめ……」

「あは、ごめん。ここ、男の子の急所だもんね。痛かった？」

「いや、痛くは……あ、ちょ、だめ」

　全裸の爆乳熟女に密着され、玉を握られて揉まれる。

　その極限状況に若い体が反応しないわけがない。

　――うわ、だめ、だめだよ。でも無理、オッパイ大きいし、エッチだし、狭いし、玉握ってきて、揉んで、こんなに裸の女の人が近づいてきて……足でオッパイ挟んで、お、お股も見えてるし……チン○ン立たないわけないよ……

　エンジンとシャワーの熱でムンムンと、裸でいることを感じさせない蒸し暑いシャワー室の中、反りあがる巨棒に目を輝かせるコトネ。

　初めは笑っていた。余裕をもって、驚いた演技の用意をしていた。

　だが途中から、頬が引きつり、軽く仰け反る。

「ちょ、ちょ、ちょ、お、大きい……大きいね、ハルトモくんのアソコ……」

「い、言わないで……」

　顔を真っ赤にして、目を逸らす。

「ご、ごめんごめん。でも大きいほうがいいのよ？　おチンチ○は。子供にはわからないけど、大人の女にはわかるのよ」

　顔を赤らめ、巨棒を見上げる。

　腕ほどである。それも**ハルトモのではなく、コトネの腕。**

　演技ではなく目を見開き、何度目になるかわからないが唾をのむ。

「うわ、うわ……き、君の年でこれは凄すぎるわ……このままいったらどうなっちゃうの？」

「み、見ないで……」

「もう、しょうがないねえ。これで普通に戻してあげるわ」

　顔をそらしているハルトモ。突き出さざるを得ない形の巨棒が、弾力ある巨大なプリンのようなものに包まれるのを感じる。熱い、温かい。

　見ると、スイカ二つ。

「あ、お、オッパイ……うわああ、そ、そんなこと……だってチン〇ン……」

　スイカ大のプリンの谷から、にょっきりと亀が巨大な頭を突き出していた。

　目を丸くする爆乳熟女。

「凄いわあ、こんな……私のオッパイから顔出すチン〇ンは初めて……」

　左右から圧迫する。

「あ、おおお」

「オッパイで、すぐ楽にしてあげるからね」

だらり、と涎を垂らす。巨棒の頭に。

それと、汗がねっとりと巨棒を濡らしていく。しみこむにつき、さらに熱に包まれることを感じるハルトモ。

「あ、あ、あつ……ああっ！」

「そらそら、挟んで絞る、挟んで絞る」

腕のような巨棒に左右から吸い付く肉プリン。タプタプと揺れながら根元から頭までこすり上げる。

「あは、抜けるかもって心配しないでいいパイズリなんて初めて……そらそら、思いっきり上にあげて、放してまた下から」

「うわっ、や、あっ」

ブルンブルンブルン、肉プリンに挟まれ、しごかれ、ぬるぬると熱い感触に白目を剥きかけるハルトモ。出しちゃえ、一気に出しちゃえと思いつつ下がるハルトモを追い、壁に押し付けてあくまでもパイズリのコトネ。頭にもべろりと舌を這わせる。

「はひっ、チンっ……きたない……」

「シャワー浴びたんだから、汚くないよ」

　言いつつ、鼻をひくつかせる。頭を殴られる。ある種の薬物めいた異様な臭い。

　——お、雄臭……タマタマ取らないと肉が臭くなるって本当なんだって実感できちゃう……タマタマがデカいだけのことはあるわ。っていうかこんな臭いがするんだから、もう自分で出してるんじゃない？

　それなら、面倒がない。思い切って尋ねる。

「ねえ、ハルトモくん、白いおしっこ出したことある？」

「え、な、何それ……」

　眉を吊り上げ、目を逸らす。

　それを見て、頬を緩める熟女。

「あはは、嘘ねー。あ、もしかして……クラスの女の子たちに……」

「ち、違うよ！」

　絞られている。

　ロリたちに巨根を見られ、撫でまわされ、立つとしごかれ、昂奮してくると舐めてくるものもいる。

　そうして毎日何度となく放出させられていた。巨玉に見合うドロついた白濁液を。

「知ってるなら話は早いわ……お姉さんが出してあげるね！」

「や、やめ……」

「あ、やめてほしい？　じゃあやめようか」

「あ」

　パイズリを止めると、唇を噛むハルトモ。

　にんまりと歯を見せるコトネ。

「うそうそ、出してあげるからねー」

「う、うん。ああっ！　ち、チ〇コ溶ける、溶けるうううううう」

「うふふ、おキンキン上がってきたわ、出そうね？　出そうね？　出しちゃって、思いっきり……あっ」

　ビクン、と巨棒が痙攣する。噴水のように、白濁液が吹き上がる。

　ハルトモは全身の神経が一物だけに集中したように感じていた。包み込む肉プリンは、それこそ全身を包んでいるかのよう。全身の筋肉が硬直し、すぐに緩む。舌が意味もなく口からでる。ロリたちに出された時とは全く違う、安心と温かさに包まれた絶頂。

　——ああ、溶ける、溶ける、体が、タマタマが……溶けちゃう……女になっちゃう……頭おかしくなる、こんな……会でやられるのとは全然違う。やっぱり大人の女の人が一番だ、子供なんてだめだよ……あんな奴ら、オッパイもないし。

　涎を垂らし、棒立ちのハルトモ。

　まだまだ、大量に出る。

「ちょ、おぶっ……ああ、す、すごい、なにこの見ただけで妊娠しそうな毒汁は……」

　勢いよく吹き上がり、ぼたぼたと肉プリンをデコレーションするショタ毒汁。

　肉プリンの間の巨棒がまだまだ固く、熱いままなのを感じてコトネは自分の下腹部が熱くなるのを感じずにはいられなかった。

　——こんな小さいのに、雄だわ、この子……

うるんだ目で見下ろす。脳が溶けたように舌を出し、無我の境地で立ち尽くす巨根ショタを。

——これはもう、本番しかない。まだ元気いっぱいだし。若いって最高。

べろりと、唇を舐める。

幸いというか、シャワー室の中もエンジン音でいっぱい、セックスの音ぐらい外には聞こえない。

ここでしたことはないが、聞こえないだろうと踏んで、コトネはとりあえず白濁液が止まるのを待つ。

——っていつまで出てんのよ！？　キ〇タマデカすぎなんじゃないの？

引きあがった巨玉が肉プリンに当たっている。

まだ何発もいけそうな逞しいそれに期待しつつ、少し笑ってしまうコトネ。

体験版終わり

この後ショタを食いまくる熟女たち

恥ずかしいとかなんとか、そんなショタの声など無視、気持ちいんだからいいだろうというスタンス

続きは製品版でお楽しみください